「読売新聞 よみうり抄」大正篇第一巻 刊行に寄せて

読売新聞文芸欄に掲載された雑報欄「よみうり抄」が、「読売新聞 よみうり抄」大正篇第一巻として文化資源社から刊行された。今後、全5巻の刊行が予定されている。よみうり抄研究会代表の杉浦静・大妻女子大名誉教授が、その意義と文学研究にもたらす可能性を寄稿した。

杉浦静

大妻女子大名誉教授

すぎうら・しずか　1952年生まれ。大妻女子大名誉教授（日本近代文学）。著書に『宮沢賢治 生成・転化する心象スケッチ』。

日本近代文学史において、読売新聞は大きな役割を果たした。明治以降の文芸欄は、上司小剣や正宗白鳥ら多くの作家が健筆を振るった。明治から大正までの近代文芸関係作品、記事の全細目をまとめた『読売新聞文芸欄細目』も、近代文学研究の泰斗だった紅野敏郎氏によりまとめられている。

その文芸欄の片隅に置かれたのが「よみうり抄」だ。近代文学の研究で引用されることなどから、私は存在を知った。文学者や画家、文化人の動向や出版情報、展覧会情報などが雑報の形で、短いながらも詳しく記され、時には一般記事より興味深いものがある。2001年に研究会を作り、仲間の研究者や学生たちと少しずつ読んできた。

文芸欄の片隅で 文化人の動静や お知らせ細かく

よみうり抄は、記者が直接取材したものや、届いた手紙などから書かれた。作家の年譜に掲載されていない内容もあり、生き生きした情報にあふれている。

たとえば、よみうり抄は作家の芥川龍之介の誕生の瞬間から、文壇で認められていく姿を収めている。

▲柳川隆之介氏　は今後本名芥川龍之介を用ふる由尚ほ小説『鼻』を『新思潮』に寄せたりと」

これは当時、東京帝大の学生だった芥川龍之介が、「柳川隆之介」から改名したことを伝える1916年1月22日のよみうり抄の記述だ。同じ日のこの欄は、すでに劇作家として評価を得ていた久米正雄らと、同人誌「新思潮」を再興することも伝えた。改名で心機一転を図り、新思潮に臨む芥川たちの姿がうかがえる。

この記事にある「鼻」が夏目漱石に激賞され、芥川は文壇に出ることになる。

すぐ後の2月29日付には、「▲芥川龍之介氏　は平安朝時代より材料をとれる小説『ポー』を『新思潮』三月号に寄稿せり」と続報がある。漱石の賛辞を受けて書こうとしたのだろうか。だが現実にはこの作品は書かれず、「ポー」は題名だけが残る幻の作品となる。

この後も、よみうり抄は芥川が海軍機関学校教官となったことや、流行性感冒にかかったこと、結婚や新居への移転など細々と情報を伝えた。これらの情報は、新聞読者の小説家に対する親近感を高めた。新聞社の側も、読者の関心が深い文化関係者の動向を伝えることが、政治や事件・事故のニュースと合わせて読者獲得につながったのだろう。

よみうり抄は、画家たちの動静も多く報じている。「写生旅行中」とか、「写生中」とかいった情報に加え、展覧会情報も多い。そこには日時や会場と、読者が出かけられるように住所も付されている。1917年10月25日には、彫刻家の高村光太郎がニューヨークで個人展覧会を開くため、「彫刻を頒つ会」を起こすといった記事が掲載されている。まるで、現代のクラウドファンディングのようだ。

文化人の細かな動静やお知らせといった情報を掲載したよみうり抄は、現在のSNSを思わせる。大正期の新聞は、マスメディアでありながら、同時に現在よりもパーソナルなメディアの要素が強かったのかもしれない。

まるでSNS 大正の「よみうり抄」

様々な文化人の情報を伝える「よみうり抄」

写真は国立国会図書館「近代日本人の肖像」から

「芥川」誕生の瞬間など

生き生きした情報の宝庫

忌まわしい記憶書き残す

「子孫繁栄」祈る人間の業

文芸月評

人間や社会が経験した忌まわしい記憶を活字にし、物語として残すことも小説の大きな役割だ。

中西智佐乃さん(39)が発表した「橘の家」（新潮）は、子孫繁栄を祈ってきた人間の業を浮き彫りにする。おおよそ半世紀にわたる、ある家族と、その家の庭に立つ木を巡る物語だ。

幼児の時に2階から転落した娘の恵実は、庭にある大きな橘の木がクッションになり、一命をとりとめた。橘の木は子孫繁栄の象徴とされ、子どものできない女性たちが、拝みに来るようになる。

恵実には女性の腹をさすると「小さきものの存在」を感じ取って妊娠しているかどうかがわかる能力が備わり、謝礼を受け取って「先生」と呼ばれるようになる。

恵実に加え、母親の秋江、息子の豊の視点で物語は進行する。恵実もまた妊娠できないことに思い悩む。

中西さんは老人に暴力をふるう介護福祉士を描いた「尾を喰う蛇」で2019年に新潮新人賞を受賞しデビュー。これまでに痴漢加害者を主人公にした「狭間の者たちへ」などを発表し、社会が抱えるひずみを丁寧な筆致で物語の形に落とし込んできた。

■中西智佐乃さん（新潮社提供）

■上田岳弘さん

■筒井康隆さん

今作では△子孫繁栄をどうして人間は願うのでしょうね▽という言葉が何度も繰り返される。現在は晩婚化が進み、子どもを持たない選択肢が当たり前になった一方で、かつては妊娠できない女性を責め立て苦悩させる、男性中心の傲慢な社会が間違いなくあった。そのような社会で交わされた言葉は、今も女性たちを苦しめているのではないか。子孫を残すことは人間にとって何なのか、中西さんは根源的な問いかけを提示している。

■コロナで変容した社会

現代社会が経験した近年の大きな出来事に、新型コロナウイルスの感染拡大がある。

上田岳弘さん(45)の「生的同意」（すばる）はプログラマーとして働く男性の物語で、コロナ禍で変容した社会を克明に描写する。

主人公はコロナ禍前を「そう昔のことでもないのに、前世の出来事のように感じ」ている。主人公は過去と現在における女性との交際を比較して、コロナ禍後の自分が他者からの承認を真剣に願い、追い求めていることに思い至る。時に、コロナで亡くなったり自粛生活の中で自死したりした有名人のことを回想する。主人公の「ほんのわずか、世界のルールが変わったようだ」という言葉に反して、社会は劇的な変貌を遂げ、みを過去のものにしている。

「すばる」は「コロナ書かせた小説たち」と古川真人さん(36)と小子さん(41)の対談を た。古川さんは九州の台にした芥川賞受賞作泡立草』に連なる短編新刊『港たち』にまと島の物語に戻ったのはナ禍で帰省できなくなの機会に小説で帰省を よう」と思い立ったか明かす。小山田さんも禍の日常を描いた連作『最近』を刊行した。さんの「『ふつう』っなに移り変わり続けるのか。そう気づかされ今の時代なんだと私は います」という言葉に の実感がにじんでいる。

埋もれがちな

日本語版サイト「AWARE―日本」

介。埋もれがちな女性作家を「発見」する入り口となることを目指す。

よみうり抄

◆第70回小学館漫画賞　とよ田みのる『これ描いて死ね』（ゲッサン）▽武蔵野創『灼熱カバディ』（マンガワン）▽乃木坂太郎『夏目アラタの結婚』（ビッグコミックスペリオール）▽まえだくん『ぷにるはかわいいスライム』（週刊コロコロコミック）。副賞各100万円。

小学館は、漫画が世代や性別を超えて広く読まれる文化となっていることを踏まえ、前回から「児童向け」「少年向け」といった部門を廃止している。